

‡ 苦悩から始まる幸福の探求 ‡

紀元前600年頃、北インドのカピラ城(図1)に浄飯王と摩耶夫人という妃がいて、ようやく身籠もった妃が実家に帰路中、紀元前624年4月8日に産き付き、一面に花が咲き誇る「ルンビニ園」で男の子を出産した(図2)。

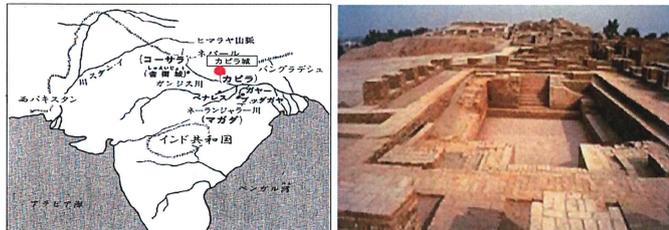


図1. カピラ城の場所と城跡



図2. ルンビニ園の花

生まれた子供の名は「ガウタマ・シッダールタ」といい、後に「釈迦」と呼ばれるようになる。生まれた直後、7歩歩き、右手を上左手を下にして「天上天下唯我独尊」と発したとの逸話がある。

出産7日後に母親の摩耶夫人が亡くなったため浄飯王は彼女の妹「魔訶波闍波堤」を妃にした。

浄飯王は著名な占い師「アシダ仙人」を呼び、「この子は私の後継者として立派な王になるか」尋ねると「この子は立派な王になるか世界の人々を救う聖者になる」と予言した(図3)。



図3. アシダ仙人に予言される釈迦

王が賢者「バッドラニー」と文武の達人「センダイダイバー」を付け英才教育を始めたが、釈迦が聡明で万能過ぎるために2人とも逃げ出してしまった。

釈迦が19歳のとき、国一番の美女「耶輸陀羅姫」と結婚し、1年後、女の子「羅候羅」を授かった。

しかし、毎日、塞ぎ込む釈迦を見た浄飯王は四季の御殿を建造し、御馳走と500人の美女を侍らせたが釈迦の悩みは一向に解消しなかった。

その理由は、城を出ることを禁じられていた釈迦が目にした城下の光景であった。

城の「東門」には腰が曲がり杖を付く“老人”が「南門」には横たわって苦しむ“病人”が、「西門」には痩せ細って動かない“死人”がいて、身分や富に限らず“人は生まれて老人となり病気で死ぬ”「生老病死」から逃れられないことを知り、「北門」で僧侶と出会い真の幸福を求める道があることを知らされ、最もなすべきことを悟ったのである。これは「四門出遊」と言われている(図4)。



図4. 「四門出遊」と「生老病死」

ある朝、釈迦29歳のとき四季の御殿で釈迦が目覚めると、そこに昨夜美しく着飾って踊っていた女達がだらしない姿で寝ているのを見て幻滅し、怠惰な生活を悔み白馬に乗って、王室の使用人「車匿」と夜秘かに城壁を抜け出した。

跡継ぎが不在になり浄飯王が落胆していると「橋陳如」が「私が探します」と申し出たため5人を遣わし、500km離れた苦行林で釈迦を発見した。

釈迦に、なぜ貴方は“若く健康で運動神経も抜群で家族も健在で裕福なのに、楽しみを捨てて悟りを求めるのか?”と問うと、“財産も名誉に満ち溢れていてもやがては崩れ去ってしまう儚い幸福では、真には満たされない”と釈迦は返答した(図5)。



図5. 五比丘

その言葉に頷いた「橋陳如」「阿説示」「摩訶男」「婆提婆沙波」が5人の弟子「五比丘」である (図5)。

釈迦は、城の外に出て出会った修行僧の清らかな姿に感銘を受け、“これこそ苦しみを克服する道”と決意し、修行に精通した3人の僧に従事した。

釈迦が最初に訪れたのは、“天上界に生まれ変わる”ことを目指して苦行を行っていた「バッカバ仙人」であったが、自分自身が習得するのではなく、天界に答えを求めていることに気づき、他力本願では悟りは開けないと察し仙人のもとを去った。

次に訪れたのは、300人の弟子をもつインド有数の思想家「アーラーラ・カーラーマ」から“肉体は単に入れもので大切なのは想念である”という「空無辺所」という教えを釈迦はすぐに体得すると“後継者として指導”を懇願されたが悟りは開けないと察して彼のもとを去った。

次に思想家「ウッタカラーマ・プッタ」に師事し“雑念を取り払う”という「悲想非非想処」という教えであったが、釈迦はすぐに体得すると“後継者”にと懇願されたが釈迦の求める境地には至らないと彼のもとを後にした。

結局、いずれの教えも釈迦にとっては腑に落ちず最終的に自身で苦行を課す修行を行うことになる。

釈迦は「ウルヴェーラーの林」(図6)で父親が遣わした5人の弟子「五比丘」と共に6年間、断食を始め様々な苦行を行ったが、心身が衰えるだけで歩くこともできなくなった釈迦は苦行を止め、苦行林を出て河で身を清め、体力回復のため村娘「スジャータ」から“乳粥”の布施を受け気力は回復した (図7)。



図6. ウルヴェーラーの林



図7. 釈迦の苦行と乳粥の布施



図8. 釈迦の入滅

それを見た弟子達は釈迦が苦行に耐えられず、墮落した釈迦には随従できないと隣国に去っていった。

行き過ぎた苦行は無意味だと知った釈迦は、ブッダガヤの菩提樹下で座禅を組み、“悟りを得るまで動かない”と覚悟を決め、瞑想中、様々な脅迫や悪夢と戦い固い意志で克服し、35歳で一切の迷いが晴れ、悟りを開き「仏陀」となった。

釈迦から去った弟子達も戻り、布教伝道を始めた。釈迦が80歳、2月15日に食中毒で入滅(図8)するまでの45年間の教えが『仏教』であり、その後、日本に仏教が伝来(図9)、縄文時代から開祖や教典をもたない“森羅万象に神が宿る”「神道」と融合し「神仏習合」(図10)となった。

科学が進歩した現在でも、宗教を根幹とした戦争は終わることはなく、ヒトは民族・宗教の枠を越え平和を維持することはできないのであろうか? (図11)



図9. 仏教伝来



図10. 神仏習合

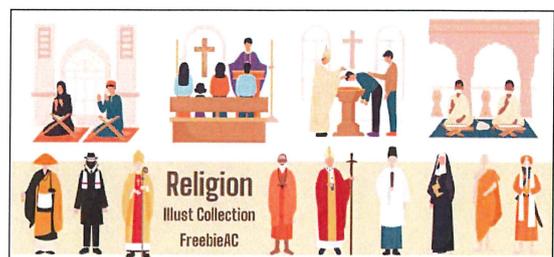


図11. 世界の宗教